

誰かを憎んだことありますか

毎日新聞（18.4.11）

<・・・は省略部分／太字は引用者による>

原爆投下や原発事故を巡って外国人からこう指摘されることがある。「**日本人はもっと加害者を、責任者を憎んでもいい。なぜそんなにおとなしいのか？**」。私たちは誰かを、もしくはある国を憎むという意味を、その影響を心底分かっているのだろうか。「憎しみ」をテーマにした映画を撮ったドイツ人の映画監督、ファティ・アキンさん（44）と、社会学者、大澤真幸さん（59）と共にみた。【藤原章生】

・・・**集団としての憎しみはどうか**。第二次世界大戦当時、民族として日本人はいわばレイシズムの加害者であり、被害者でもあったが、**ナチス・ドイツの虐殺に遭ったユダヤ人ほどの憎しみを抱えてこなかった**。

・・・著書「憎悪と愛の哲学」で日本人の憎しみの薄さを論じた大澤さんにその疑問を投げ掛けた。「**アイデンティティや信仰、世界観など、自分にとって一番大事なものが侵された時に憎悪は強まる**。でも歴史を見ると日本人同士の紛争は領地争いが主だった。『相手も折れたから、折れなさい』という第三者の仲裁や、互いのメンツを立てる形などで解決してきた。そのような国民性だから、戦いの後に憎悪が少し残っていても**復讐心をいつまでも抱くことはなかった**」

50万人もの一井の人々が空襲や原爆で命を落とした太平洋戦争はどうか。「アメリカから見れば、民主主義に対する脅威と戦うという価値観を懸けた面があったが、日本人は『鬼畜米英』と言いながらも**利害の戦い**」と見ていた。だから、米国に対する真に深い憎悪には至らなかった」

大澤さんは新作「サブカルルの想像力は資本主義を超えるか」の中で、日本人の憎悪の薄さに驚いた経験を吐露している。終戦数カ月後に米国によって行われたアンケートの結果を見た時だった。「原爆投下に対して、アメリカに憎しみを感じますか」との問いに「**憎悪を感じる**」と答えた日本人は12%。<広島・長崎で調査しても、19%にしかない。つまり5人に1人です。これはやはり驚きます>。一晩で10万人が亡くなった東京大空襲についても研究者は似た話をする。

何事も憎まない方がいい。水に流す一。日本人の特性としてよく語られることだが、「そこが日本人の問題」と大澤さんは指摘する。「**他者への憎しみが弱いと、自己批判しなくなる**からだ。アメリカへの憎悪は自分たちへの反省、自己嫌悪として跳ね返ってくる。それは自分たちの弱さを乗り越える契機にもなり、批判力になるのだが、日本人はそこをすっ飛ばしてきたのではないか」

その説明を聞くと、映画監督の伊丹万作が終戦1年後に記した言葉を思い出した。<（国に）「**だまされていた**」という一語の持つ便利な効果におぼれて、**一切の責任から解放された気**でいる多くの人々の安易きわまる態度を見るとき、私は日本国民の将来に対して暗澹あんなたる不安を感じざるを得ない>

憎しみを抱えないためには、**自分をごまかす**しかない。「（戦争は）『負けるべくして負けた。もともとこんな腐った国は、自ら負けようと思っていたのだ』と考える、恨みも出てこない」。日本人の多くが自らを欺いたと大澤さんとはとらえている。

そのような生き方は「飢餓海峡」「砂の器」「人間の証明」など、高度成長期に映画化されたベストセラー小説の主人公に投影されている、と大澤さんは指摘する。彼らは戦後の混乱期に、生きていく上で、成功を目指す中で決定的な「ごまかし」をしている。「そのようなごまかしが、日本人の集合的無意識に触れたから」ヒットしたのではないかと分析する。・・・